

コミュニケーション能力を高める体育学習の在り方

— 学びへの意欲と学びの質を高める言語活動を中心に —

体育・保健体育科研究会議

中野 正明¹

井上 美代子²

中西 幸太³

今枝 春美⁴

要 約

学習指導要領の改訂に伴って、保健体育科においても言語活動の充実が求められるようになった。体育学習は、単に体力や技能の向上のみを直接の指導内容としているのではなく、その学習過程において、ルールやマナーを守ろうとすることやチームの作戦や個人の課題を解決に向けての教え合おうとする態度などを重視していることから、言語活動が指導内容に複合的に内包されていると考えられる。

そこで本研究では、体育学習における言語活動を充実させることは、語彙や表現力を獲得し、自分や他者の感情や思いを受け止めることができるなど、コミュニケーション能力を高めると考えた。また、子どもたちが豊かにかかわりながら安心して楽しく学習に取り組むことができれば、学習の質や意欲が高まり、知識の獲得や技能の習得にもつながるのではないかと考えた。

検証では「話し合いのルールカード」「技能確認カード」「アドバイスカード」を用いた結果、話し合いのルールがあることで安心して仲間とかかわることができ、コミュニケーション能力や学習意欲が高まった。その後、アドバイスカードを用いてアドバイスの内容や技能のポイントを教え合うことで、仲間とのかかわりが増え理解の深まりから知識の獲得や技能の習得につながることがわかった。

キーワード：言語活動の充実、教え合い、学習意欲の高まり、知識の獲得、技能の習得

目 次

I 主題設定の理由	82	5 研究の方法	87
1 学校における体育学習から	82	6 検証授業の実際と考察	88
2 子どもたちの実態から	82	III 研究のまとめ	95
3 学習指導要領の改訂から	82	1 仮説の検証	95
II 研究の内容	83	2 今後の課題	95
1 研究の仮説	83	参考文献	96
2 研究の流れ	83	指導助言者	96
3 「かかわる」ことからの理解	84		
4 コミュニケーション能力と言語活動	85		

¹川崎市立稲田中学校教諭（長期研究員）

²川崎市立上作延小学校教諭（研究員）

³川崎市立王禅寺小学校教諭（研究員）

⁴川崎市立富士見中学校教諭（研究員）

I 主題設定の理由

1 学校における体育学習から

体育学習では、「アドバイスする」「意見の交換をする」「グループで作戦を考える」など、人とかかわり合いながら取り組む学習形態が多く取り入れられている。しかし、「うまく話し合いができない」「自分の考えをうまく伝えられない」といった状況を目にすることが多く、指導の在り方に課題を感じていた。学習ノートや班編成、掲示物や用具など工夫をして指導を行ってきたつもりであったが、子ども同士の豊かなかかわりには必ずしもつながらず、体育指導の在り方を見直す必要性を感じていた。

子ども相互のかかわりについては、辻¹⁾らは、「かかわりの中で交わされているアドバイスは、教師の言葉かけよりも生き生きとしており、わずかな技能の高まりをともに喜び合うことで、主体的に課題を解決していこうとする意欲の高まりが見られた。」とし、かかわりが豊かになれば学習意欲が高まり、技能の向上も見られるとしている。このことから学習資料を工夫し、子どもたちが豊かにかかわりながら学習に取り組むことができれば、学習意欲の高まりや知識の獲得、また、技能の習得にもつながるのではないかと考えたことが研究を進める第一歩であった。

2 子どもたちの実態から

2007年2月に行われた内閣府の「低年齢少年の生活と意識に関する調査報告書」では、「自分に自信がある」と答えた小学生が1999年9月の調査との比較で9.0%、中学生では12.1%減少している。また、「勉強や進学について悩みや心配事がある」と答えた中学生が1995年11月の調査との比較で、14.5%増加していることや、同じ調査で「友達や仲間のことで悩みや心配事がある」と答えた中学生が、11.9%増加しているとの指摘がある。このことから、自分に自信が持てない子どもが増えていることや、学習や将来の生活に対して無気力であったり、不安を感じたりしている子どもが増えていること、また人間関係が困難かつ不得手になっているとの指摘もあり、子どもたちの生活に対する不安が広がっていると考えられる。

表1 低年齢少年の生活と意識に関する調査の比較

自分に自信がある	(小)	56.4%(1999)	47.4%(2007)	9.0%減少▼
	(中)	47.4%(1999)	29.0%(2007)	12.1%減少▼
勉強や進学について悩みや心配事がある	(中)	46.7%(1995)	61.2%(2007)	14.5%増加▼
友達や仲間のことで悩みや心配事がある	(中)	8.1%(1995)	20.0%(2007)	11.9%増加▼

3 学習指導要領の改訂から

新しい学習指導要領では教育課程実施上の配慮事項として、児童生徒の言語環境の整備と言語活動の充実を掲げている。体育学習についても例外ではなく、新しい学習指導要領の総則編では、言語活動について図1のように述べている。このことから、言語活動を充実させることは、思考力・判断力・表現力等をはぐくむための重要な活動であり、確かな学力の充実は元より、「生きる力」をはぐくむことにもつながると考えられる。

¹⁾ 辻 敏明 他「-豊かなかかわりを通して、主体的に活動できる体育学習を目指して-」川崎市総合教育センター研究紀要 第14号 p 141-156

(1) 各教科等の指導に当たっては、生徒（児童）の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に関する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、生徒の言語活動を充実すること。

図1 言語活動の充実（中学校学習指導要領解説 総則編）

内閣府の調査では、「生きる力」で重視している「自分への自信や自らの将来についての関心」について課題があることがわかっている。このことについて答申でも、「生きる力」という理念の共有の中で、「自分に自信が持てず、自らの将来や人間関係に不安を抱いているといった子どもたちの現状を踏まえると、コミュニケーションや感性・情緒、知的活動の基盤である国語をはじめとした言語の能力の重視や体験活動の充実を図ることにより、子どもたちに、他者、社会、自然・環境とのかかわりの中で、これらと共に生きる自信を持たせる必要がある。」としている。また、「自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが、他者とのコミュニケーションがとれなかったり、他者との関係において容易にいわゆるキレてしまう一因になっており、これらについての指導の充実が必要である。」とも述べている。そのようなことから、コミュニケーション能力を高め、人と豊かにかかわることは、自分に自信をもち、将来に希望をもつことができる子どもたちをはぐくむためには大切であると考えられる。

これらのことから体育学習の中で言語活動を充実させることは、語彙や表現力を獲得し、自分や他者の感情や思いを受け止めることができるなど、コミュニケーション能力を高めることにもつながり、豊かなかかわりから、安心して楽しく学習に取り組むことができるようになると同時に学びへの意欲の高まりから知識の獲得や技能の習得にもつながるであろうと考え、主題と副題を次のように設定した。

研究主題

コミュニケーション能力を高める体育学習の在り方

— 学びへの意欲と学びの質を高める言語活動を中心に —

II 研究の内容

1 研究の仮説

前述の「主題設定の理由」を踏まえて、次のような仮説を設定した。

言語活動を充実させることで、語彙や表現力を獲得し、自分や他者の感情や思いを受け止めることができるなど、コミュニケーション能力を高めることにもつながるのではないかと。また、豊かなかかわりから、安心して楽しく学習に取り組むことができるようになり、学習の質が高まると同時に学びへの意欲が高まり、知識の獲得や技能の習得にもつながるのではないかと。

2 研究の流れ

(1) 研究主題の設定

問題の所在確認と、これからの体育学習に必要な身につけるべき力をさぐり主題を決定する。

(2) 実態調査

授業を参観することで子どもの実態を把握するとともに、子どもへの意識調査を実施することで、研究の方向性を定める。

(3) 授業モデル検討

「教え合い」や「話し合い」の言語活動の充実など、研究の方向性に即した学習資料を検討する。

(4) 学習カードの有効性の検証

「技能確認カード」「アドバイスカード」「話し合いのルールカード」を授業で活用することによって、学習意欲の高まりや知識の獲得、技能の習得につながるかを検証する。

(5) 授業分析、仮説の検証

検証授業における子どもの反応や学習カードの記述内容を分析し考察することで、仮説を検証する。

..... 分析・考察内容

- ①子どもたちの意欲の高まりが見られたか。
- ②「教え合い」や「話し合い」の活動での言葉の内容が変わってきたか。
- ③子どもたちの知識の獲得や技能の習得に有効であったか。

3 「かかわる」ことからの理解

体育学習では、「教え合い」や「話し合い」の活動を行う際、個々の“技能の差”によって、それが成立するのかがもっとも懸念される。つまり、「上手な子」と「下手な子」が同じグループや集団で、お互いに教え合ったり、話し合ったりすることが有効なのかということである。

このことについては、出原²⁾は次のように述べている。「子どもたちは異質集団のなかで学ぶときに最もよく『わかる』といわれている。自分とは違う考えや自分とは異なる表現、うまさと対面することによって、自分自身の姿や位置、認識を鮮明にすることができるからである。自分と友達はどこが違うのか、自分のどこができていて、どこができていないのかが『わかる』のである。自分とは異なる個性と技術学習の出来具合との交流の中で、技術認識を媒体として他との結合を深めていく」とある。このことから、“技能の差”のある者同士が教え合ったり、話し合ったりすることは、他者の技術や自己の技術を認識するためには有効な手段であると考えられる。しかし、「わかる」が技術認識や科学的な認識と結合されていない場合には、「なぜできたのか」「自分はどこがよくなったのか」がわからず、相手の理解しやすい言葉を用いたり、身体表現を交えたりして自分の意思を伝えることは難しい。そこで、言語活動を充実させることで、「なぜできたのか」「自分はどこがよくなったのか」を技術認識や科学的な認識と結合させ、「わかる」ということを理解させることが大切である。

岡出³⁾らは「わかる」と「できる」について、「『わかる』と『できる』の統一を目指す授業では、子どもたちにスポーツの技術に関する科学的な認識が養われていく。」としている。また、「『できる』ために必要な『わかる』内容とは、技術の構造や練習の方法に関する知識である。」としている。このことから、わかるために必要な学習資料として、技能のポイントやつまずきを解消するためにアドバイスしあえるような内容を明記した学習資料が必要であると感じた。そして、このような学習資料を活用することで、技術のポイントを理解し、相手の理解しやすい言葉を用いたり、身体表現を交えた

²⁾ 出原 泰明 『「みんながうまくなること」を教える体育』大修館書店 pp7-8

³⁾ 高橋 健夫・岡出 美則 他『体育の授業を創る』—創造的な体育教材研究のために— 大修館書店 p139

りして自分の意思を伝えることができるようになるのではないかと考えた。

そこで本研究では、わかるために必要な学習資料として「技能確認カード」と「アドバイスカード」を用意した。このカードは、コミュニケーション能力の基礎である言語的な活動として、話すことや読むこと、聞くことを取り入れ、「生きる力」で目指している思考力・判断力・表現力等をはぐくむこと、また、「わかる」ことで学習への意欲の高まりが期待できると考えた。そして、「わかる」が技術認識や科学的な認識と結合されたとき、相手の理解しやすい言葉や身体表現を交えて自分の意思を伝えることができるようになり、理解の深まりや人との豊かなかかわりによって、コミュニケーション能力が高まり、知識の獲得や技能の習得にもつながると考えられる。

4 コミュニケーション能力と言語活動

(1) 体育学習におけるコミュニケーション能力の必要性

体育学習では、「アドバイスする」「意見交換する」「グループで作戦を考える」など、仲間とかかわる活動は重要な取組とされている。これは、仲間とコミュニケーションを取ることで、「教え合ったり」「話し合ったり」「伝え合ったり」「共感し合ったり」するなど、互いを認め合いながら、ルールへの厳守や互いの尊重などの公正な態度を育成し、学習意欲の向上や技能の向上を期待する学習活動である。

一般的にコミュニケーション能力とは、言葉や文字・身振りなどによって、意思・感情・思考・情報などを伝達・交換する能力であり、社会生活を営む人間の間で行われるものである。このことからコミュニケーションは、大きく2つに分けることができる。一つ目は言葉や文字を使った言語的な活動であり、二つ目は身振りなど表現によって行われる非言語的な活動である。体育学習の中での位置づけとして、図2のような活動が考えられる。

1 言語的な活動	
(1) 言語	→①話 す・・・「教え合い」「話し合い」など ②聞 く・・・「教師の話聞く」「仲間の話を聞く」など
(2) 文字	→①書 く・・・「学習ノートへの記入」など ②読 む・・・「教科書を読む」「学習資料を読む」など
2 非言語的な活動	
表現	→①伝える・・・「ダンス」など ②受容する・・・「サイン」「ジェスチャー」「アイコンタクト」など

図2 体育学習におけるコミュニケーションの分類

体育学習では先程も述べたように、仲間とコミュニケーションを

取りながら、ルールへの厳守や互いの尊重などの公正な態度を育成し、学習意欲の向上や技能の向上を期待し取り組むことを重視している。そのことから言語的な活動である「話す」「書く」「読む」「聞く」、また、非言語的な活動である「伝える」「受容する」などの活動を積極的に取り入れることは、コミュニケーションを豊かにすることにつながると考えられる。

(2) 体育学習における言語活動

①学習指導要領における言語活動

新しい学習指導要領では、言語活動の充実が思考力・判断力・表現力などをはぐくむことをねらいとしており、そのための言語環境を整えることが大切であると示されている。そこで、どのような学習活動を体育学習に取り入れることができるのか、具体的な取組を考える必要がある。

答申では、児童生徒の思考力・判断力・表現力等をはぐくむためには、図3のような学習活動が重

要であるとしている。そして、これらの活動は言語が基盤であり、各教科の教育内容として、記録、要約、説明、論述といった学習活動が必要であると述べている。

そこで、言語を基盤とした学習活動を参考に、話すこと、書くこと、読むこと、聞くことなどコミュニケーション能力の基礎である言語的な活動を基に、体育学習における言語活動の例を図3のように示した。

佐藤⁴⁾は体育学習における言語活動の充実は、次のような場面が求められるとしている。

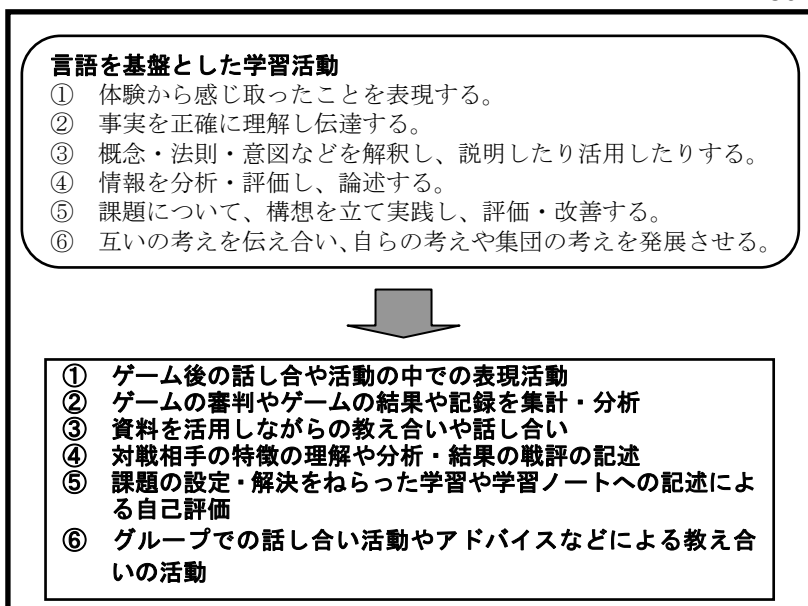


図3 体育学習における言語活動の例

- ・仲間と教え合う場面で、技能の構造や行い方などの知識を基に、動きの改善点などについて、相手の理解しやすい言葉を用いたり、身体表現を交えたりして自分の意見を伝える。
- ・話し合う場面で、練習や試合の結果を基に課題となっている点について、仲間の意見を聞いたり、仲間の感情に配慮しながら自らの意見を伝えたりする。
- ・話し合う場面で、一度立てた作戦などに対して、建設的な批判的思考を用いて、作戦の見直しを図ったり、新たな作戦を提案したりして、チームの合意形成を進める。

図4 言語活動の充実に向けた具体例

しかし、これらのすべての活動を体育の授業で実践していくことは、言語活動を中心とした活動に終始してしまい、体育学習で身につけさせたいそれぞれの運動が有する特性に応じた基礎的な身体能力や知識などを身につけさせることができなくなってしまう。そこでこれらの例を参考に、どのような力を身につけさせたいのかを明確にすることで、授業で実践できる言語活動を具体化し、子どもの実態や領域・種目の内容に応じた指導の工夫や資料活用の仕方など言語環境を整えながら、言語活動を充実させることが大切である。

②各領域における言語活動

体育学習ではすべての領域において話す・書く・読む・聞く・見る・伝えるなどの言語活動を取り入れているが、領域によってはコミュニケーションの方法や言語活動の内容が異なる。

表2 領域によるコミュニケーション

領域	コミュニケーションの方法（言語活動）
陸上競技 器械運動 武道、水泳 ダンス	技能の構造や行い方などの知識を基に、動きの改善点などについて教え合うなど動きの言語活動。
↑ ↓	
体づくり運動 球技	練習や試合の結果をもとに、課題についての話し合いや、一度立てた作戦などに対して、建設的な批判的思考を用いて、作戦の見直しを図るなどの言語活動。また、人間関係、位置関係を含めた言語活動。

具体的には表2のように、陸上競技や器械運動、武道などのように個人を主とした運動と球技のように集団を主とした運動がある。ただし、陸上競技のリレーや武道の団体戦、創作ダンスなどは、話し合う活動（作戦を立てるなど）も含まれるため、学習内容によっては言語活動の内容が集団を主とした場合と同じものになることがある。球技においても個人的技能の習得については、言語活動の内容が個人を主とした場合もあり、学習内容に応じて言語活動の内容に違いがあることを考え取り組む必要がある。

⁴⁾ 佐藤 豊 「中学校体育学習における言語活動の充実」 中等教育資料—言語活動を重視した指導の充実— 平成20年5月号 p p 62-63

5 研究の方法

(1) 調査対象

川崎市内小学校 2校	第 5 学年 1 学級	27 名 (男子 15 名、女子 12 名)
	第 6 学年 2 学級	52 名 (男子 30 名、女子 22 名)
川崎市内中学校 1校	第 1 学年バレーボール選択者	60 名 (男子 14 名、女子 46 名)

(2) 調査時期

検証 1	: 平成 20 年 9 月	小学校 6 年生	領域 球 技	単元名 「バスケットボール」
検証 2	: 平成 20 年 11 月	中学校 1 年生	領域 球 技	単元名 「バレーボール」
検証 3	: 平成 20 年 11 月	小学校 5 年生	領域 陸上運動	単元名 「ハードル走」

(3) 調査方法

①事前意識調査

「教え合い」や「話し合い」の活動を子どもはどの程度経験しているのか、対象となる学年の子どもの授業実態を把握し、意識調査を実施することで、それを資料として言語活動の充実に必要な手立てを検討する。

表 3 アドバイスや話し合い活動の状況

	項 目	はい	いいえ	どちらとも いえない
1	友達にアドバイスしたことがありますか	60%	20%	20%
2	自信をもってアドバイスすることができますか	32%	30%	38%
3	アドバイスしてもらったことがありますか	81%	7%	12%
4	もらったアドバイスは満足できるものでしたか	54%	10%	36%
5	話し合い活動をしていますか	48%	12%	40%
6	話し合い活動の時間は十分ですか	31%	18%	51%
7	話し合い活動で自分の意見を言えますか	44%	22%	34%
8	話し合いで自分の意見は認めてもらえますか	46%	16%	38%
9	人の意見を聞いて「なぜ」と考えますか	52%	15%	33%
10	人の意見に対して質問したり意見したりしますか	45%	25%	30%
11	運動が上手になるためには話し合いは必要ですか	82%	5%	13%

※調査数

- ・小学校
- 5 年生 88 名
- 6 年生 52 名
- ・中学校
- 1 年生 180 名

事前の調査の段階では、各学年の子どもを対象として調査を行った。

②話し合いのルールカード

答申の中で、「自分や他者の感情や思いを表現したり、受け止めたりする語彙や表現力が乏しいことが、他者とのコミュニケーションがとれなかったり、他者との関係において容易にいわゆるキレてしまう一因になっている」という指摘があることを考えると、安心して自分の意見や思いを表現し、コミュニケーションを取れる場面を設定する必要があると考えた。

そこで、学校や学年、学級の現状を考慮し、指導者のねらいに応じた約束ごとを明記するとともに、子どもが安心して意見を述べたり、聞いたりできる状況をつくり出すことができるように、図 5 のような「話し合いルールカード」を活用する。

③技能確認カード・アドバイスカード

事前の意識調査で、対象となる学年の子どもは「自信をもってアドバイスできますか」という問いに対し、約 7 割が「自信がない」または「どちらともいえない」と回答している。(表 3 参照) このことから、アドバイスに対して自信が持てないということは、運動の行い方や技能のポイントが理解できていないのではないかと考える。そこで、技能のポイントや教師が子どもに理解させたい言葉が明記してあるカードを提示し、教え合いの中でアドバイスがしやすいように工夫する。

話し合いの約束

- ① 友達の発言をさえぎらない。
- ② 話すときは、だらだらとしゃべらない。
- ③ 話すときに、怒ったり泣いたりしない。
- ④ 分からないことがあったら、すぐに質問する。
- ⑤ 話を聞くときは、話している人の目を見る。
- ⑥ 話を聞くときは、ほかのことをしない。
- ⑦ 最後まで、きちんと話を聞く。
- ⑧ どのような意見であっても間違いと決めつけない。
- ⑨ 話し合いが台無しになるようなことは言わない。
- ⑩ 話し合いが終わったら、話し合いの内容の話はしない。
- ⑪ 意見に対して、必ず「どうして？」と理由を求める。

図 5 話し合いのルールカード

中学校で行われるバレーボールの授業では、個人的技能のポイントを明記し、技能を確認しながら、教え合いや話し合いがスムーズに行なわれるように「技能確認カード」を提示する。

また、小学校で行なわれるハードル走では、子ども同士で積極的な教え合いが行なわれるように具体的なアドバイスの内容を明記した「アドバイスカード」を提示する。

このようにそれぞれのカードを提示することで、運動に対する知識や理解力の向上とともに、個々の技能の習得や学習カードに記載される言葉の変容、また、「教え合い」や「話し合い」の活動における言葉の変容に期待できるのではないかと考える。

④ 検証授業の進め方

- ・「話し合いのルールカード」を活用した授業の実施（小学校6年生 バasketボール）
- ・「技能確認カード」を活用した授業の実施（中学校1年生 バレーボール）
- ・「アドバイスカード」と「話し合いのルールカード」を併用した授業の実施（小学校5年生 ハードル走）

⑤ 検証授業後の意識調査

各検証授業の単元終了後に子どもを対象に意識調査を実施する。それぞれのカードを活用した授業の実施並びに内容について、また、子どもにとってカードは「それぞれの手立てとして有効であったか」「学習に対する意欲の高まりや知識の獲得、技能の習得に効果があったか」「安心して学習に取り組むなど学習の質の高まりは見られたか」教師の感想もふまえながら検討し、その結果を報告する。

6 検証授業の実際と考察

（1）検証授業の概要

小学校で行なわれたバasketボールの検証授業1では、「話し合いのルールカード」を提示することで、安心して話し合いに参加できたか、また、安心して話し合いに参加できたと仮定したとき、学習意欲が向上し、ゲームや練習などの活動で積極的にアドバイスができるようになるであろうと考え、アドバイスすることが技能の向上につながるかどうかを検証した。

その結果、「話し合いのルールカード」を提示し活用することは、安心して意見やアドバイスする上で有効であるということがわかった。しかし、アドバイスの内容については、より多くの知識を得るためにアドバイスの質を向上させる必要があることもわかったため、学習資料を再検討し「技能確認カード」を作成した。

中学校で行われたバレーボールの検証授業2では、「技能確認カード」を提示し、知識の獲得や技能の習得に有効であるかを検証した。その結果、事後の調査から「技能確認カード」が知識の獲得や技能の習得に有効であるという結論には至らなかった。そこで、小学校で行なわれた陸上競技の検証授業3では、技能確認カードの内容や使用方法、使用時間について見直しを図り、小学校の授業で使えるように中学校で使用した「技能確認カード」に工夫を加え、「アドバイスカード」とし知識の獲得や技能の習得に有効であったかを検証した。また、検証授業1で話し合いのルールが話しやすさやコミュニケーションの取りやすさなど、安心して授業に取り組む上で有効であることが検証できたことから、検証授業3でも「話し合いのルールカード」を活用した。

（2）検証授業1

① 話し合いのルールカードの活用

5年生で行ったバasketボールの授業では、意欲的ではあったが4年生までのバasketボールの知識や技能の習得がほとんど見られず、他の人の意見を聞いたりすることが苦手な子どもが多

かった。そのような現状を考慮し、話し合いのルールカードを活用することで、体育学習でのコミュニケーション活動を活発にし、他の人の話を聞く態度を養うことをねらいとして、「作戦を考える話し合いの場面」「ゲーム終了後のふりかえりの場面」「練習でアドバイスをする場面」でカードを活用した。

②ルールを活用した話し合い（話し合いの様子）

【A班】
 A「静かにしようよ。」
 B「ちゃんとやろう。今日の試合はどうだった。」
 C「リバウンドがよかった。〇〇さんがゴール下でがんばっていた。」
 「相手のロングパスが来たとき、相手が取れなかったのを取れたのがよかった。」
 D「遠くに投げようとしちゃうけど、バウンズパスやショートパスができるといいんじゃない。」
 「違うことをしゃべっている子どもがいる」
 A「ちょっと関係ないことをしゃべらないでちゃんと話そうよ。」
 B「じゃあ次の練習のとき、バウンズパスやショートパスの練習をしよう。EとFはどう思う。」
 E「いいと思う。」
 F「いいと思うけどどんな練習するの。シュートの練習はしないの。」
 A「そうだね。シュートの練習もしよう。」

【B班】
 G「今日の試合はどうだった。」
 H「カットとかが上手だった。」
 G「みんな前よりもよく走っていた。女子もバスとか落とさないようにがんばっていいよ。」
 I「マークが出来ているけど、パスカットがもう少しだと思う。みんなまとまっちゃっているから広がったほうがいい。」
 J「固まっちゃっているとパスしにくいと思う。」
 K「バスが上に上がっちゃっている。バウンドの方が〇〇さんがいるからとられにくいと思う。」
 H「〇〇さんは高さが高いからバウンズパス取れないから、赤チームも高いからバウンズパスできたほうがいい。だからバウンズパスやシュートの練習をするといい。」
 G「今日の放課後練習しようか。」

《A班の話し合いの様子と分析》

はじめはざわざわとしていたが、話し合いのルールを意識してか、リーダー格の2人が静かにしようとするところから話し合いが始まった。話し合いのルールカードは、学習ノートに添付してあるので、いつも目に付くところにある（全体に見えるように拡大して張ってある）。一人一人が感想や意見を述べているが、その間は、他の人の意見を聞こうと余計なことをしゃべらずに聞いていた。途中、一人の子どもが他の子どもに関係ないことを話しかけていたが、他の子どもが注意し、話し合いに戻ることができた。話し合いの内容としては、なぜその技能が必要なのかという説明が抜けていることがあるが、技能に関する言葉はたくさん出ていたので、話し合いやアドバイスに必要な知識や技能をある程度理解していると考えられる。

《B班の話し合いの様子と分析》

話し合いの様子はA班よりも整然としていた。一人一人が話を聞こうという姿勢があり、意見を言う人も話しやすそうだった。Gが話をうまくまとめたことも印象的だったが、全員がゲームの内容を分析して、何をすればチームとしてよくなるのか、ゲームに勝てるのかという課題を見つけて話していることや次のゲームにつなげようという姿勢も印象的だった。前向きな話し合いの様子や、人の意見をさえぎろうとせず、きちんと聞こうとする姿勢などからこの班も話し合いのルールを守ろうとしていることがうかがえた。

③検証授業後の意識調査

検証授業後の意識調査を行い、次のような結果が得られた。

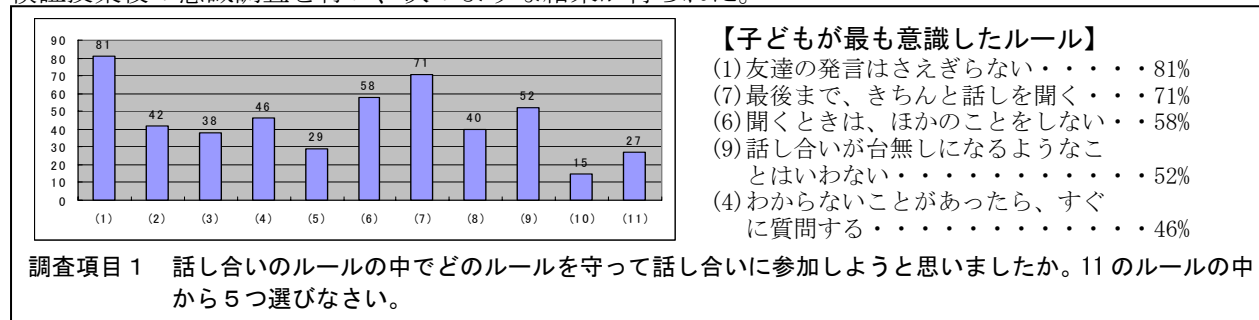


図6 意識して守った話し合いのルール

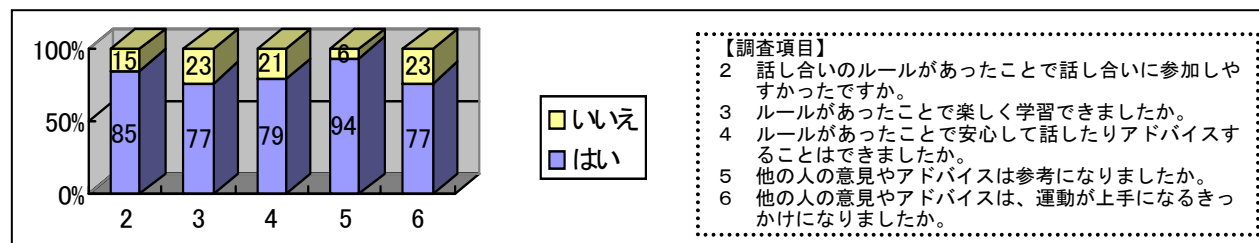


図7 事後意識調査

すべての調査項目で話し合いのルールやアドバイスについてほとんどの子どもが肯定的に捉えていることがわかった。また、感想からも子どもの約9割が肯定的な意見であった。

子どもの感想については次のとおりである。

【肯定的な意見】

- ・自分の意見が最後まで言えた。
- ・自分が話すときにルールを守れない人に守れる人が注意してくれたから話しやすかった。
- ・今まで聞いてくれなかった人が聞いてくれた。
- ・話し合いのルールがあったから参加でき、チームワークがよくなった。
- ・話し合いがしっかり出来たことによって、試合のときに話し合いで話したことができてうまくいった。
- ・みんな話し合いが台無しにならないように話していた。
- ・間違ってもいろいろいわれないので、自信をもっていった。
- ・私の話をみんなが聞いてくれたので安心して話せた。
- ・前は話し合いがあまりできなかったけど、ルールによってアドバイスをみんなにできた。
- ・シュートのときに具体的に「斜め45°からシュートすると入れやすいよ」といわれ、やってみたらとてもシュートしやすかった。
- ・バウンズパスの時に強く押すとうまくいくといわれ、やってみたらうまくいった。
- ・アドバイスのとおりにやったら、うまくパスやシュートができた。

【否定的な意見】

- ・話し合いに参加するのは当たり前だから。
- ・一回一回とめられて時間の無駄。
- ・別にルールがなくてもアドバイスできたから。
- ・このルールを考えなくても当たり前のことだから。
- ・逆にルールがあることで少しとらわれてしまうところもあったから。
- ・アドバイスされても運動力は上がらなかった。
- ・アドバイスは当たり前のことしか書いていなかったから。
- ・みんなアドバイスしたけど、アドバイスの内容がよくわかっていなかった。
- ・参考にはなるけど上手にはならなかった。

④教師の感想

【学習意欲に関して】

もともと意欲的に取り組む子どもが多く、話し合いではゲームの作戦を考え、仲間の動きを見て技術的なアドバイスをする子どももいた。話し合いのルールカードを提示することで、指導者や友だちの話聞く態度の向上をはじめ、自ら進んで話そうとする意欲（アドバイスするなど人とのコミュニケーションが広がった）の向上を感じた。

【技術的なアドバイス】

アドバイスの内容については、大きな変化は感じられなかった。しかし、話し合いルールカードを提示したことで、状況に応じたアドバイスや個々のレベルに応じたアドバイスが多くなったと感じた。技能の向上にともない、より多くの知識が得られる学習資料などが必要であるとも感じた。

⑤考察

授業の様子から、話し合いのルールを意識していることがうかがえた。話し合いのルールカードの中で、どの内容を意識して話し合いを行なったかとの問いには、「友達の意見はさえぎらない」を選んでいる子どもが多く、仲間を尊重することの大切さが理解できたことがわかる。また、「ルールがあったことで話し合いに参加しやすかった」と感じた子どもが52人中44人（85%）、「ルールがあったことで楽しく学習できた」が52人中40人（77%）、「ルールがあったことで安心して話し合いやアドバイスすることが出来た」が52人中41人（79%）と約8割の子どもがルールを意識していた。

以上のことから、話し合いの活動でルールを提示し活用させることは、活発なコミュニケーション活動を行い、仲間を尊重する大切さを理解することができるという点からも、安心して授業に参加できることにつながることといえる。

「話し合いに参加するのは当然である」「特にルールがなくてもアドバイスはできる」「ルールを考えなくても当然である」などの否定的な意見もあったが、ルールの存在の有無ではなく、話し合いを行うにあたっては、既に仲間を尊重することやコミュニケーションの大切さが身につけている子どもであると考えられる。しかし、「一回一回とめられて時間の無駄」「逆にルールがあることで少しとらわれてしまうところもあった」などの回答については、ルールカードの使い方や内容に多少課題があるとも考えられる。

アドバイスの有効性については、「他の人の意見やアドバイスが参考になった」と感じている子どもが、52人中49人（94%）いることや「他の人の意見やアドバイスは運動が上手になるきっかけにな

った」と感じた子どもが 52 人中 40 人 (77%) と多く、アドバイスすることが技能の向上に有効であることがわかった。しかし、否定的な意見の中に「アドバイスされても運動力は上がらなかった」「みんなアドバイスしたけど、アドバイスの内容がよくわかっていなかった」「参考にはなるけど上手にはならなかった」という感想があることから、より多くの知識が得られアドバイスの質を向上させるための学習資料などが必要であることを感じた。

(3) 検証授業 2

①個人的技能の習得を重点においた学習資料

小学校で経験の少ない中学校 1 年生のバレーボールの授業ということからも、ゲームで用いる個人的技能の習得に重点をおいた。そのため、「技能確認カード」を作成し、「パス」「サーブ」「スパイク」についての技能を確認する。カードには技能のポイントを明記し、3 時間ごとに使用した。

②技能確認カードを使った授業

指導者が子どもを対象に技能のポイントや活動の仕方、グループの協力について指導した。技能確認カードは個人的技能を習得するための練習で提示し活用した。

カードを活用させることで、今までにない積極的な活動が見られた。特に、自分を見てほしいとアピールする子どもや 2 人で技能の確認をするために積極的に話し合いを行なう子どもが多かった。

今回のグループ編成は、技能確認カードを活用させるために 4 人のグループをつくり、2 人がパスなどの練習を行なっているのを、他の 2 人が技能確認カードを見ながらチェックし、相談しながらアドバイスを記入させた。

③子どもの感想

【技能確認カードの子どもの感想】

○オーバーハンドパスの音が少し小さくなってよかったです。ボールを包み込むようにするとあまり音が鳴りませんでした。
 ○レシーブで相手のところへ返せるようになりました。もっと腰を下ろして手を動かさないようにして打ちたいです。
 ○スパイクを打つ時、1、2の3のタイミングで打つことができた。
 ○サーブの時、腕を伸ばして打つたらまっすぐ飛びました。
 ○オーバーハンドパスがあまり上手にできなかったの、手を開くことを意識しながら正確にボールを上げたいです。あと、手を三角の形にすることを忘れずにやりたいです。
 ○アンダーハンドパス、オーバーハンドパスの時に、ボールの真下に行くタイミングがつかめるようになりました。
 ○ラリーが楽しかった。次は今日よりも続くようにしたいです。だからボールの落ちる位置にいけるようにしたいです。
 ○オーバーハンドパスの時、相手にとどくように手を開いて膝を曲げてやる。
 ○スパイクの時、両足でジャンプしてひじを伸ばして強く打ちたい。

変容が見られた生徒のコメント

技能確認カードを使うことにより、コメントの内容については、状況に応じたアドバイスや個々のレベルに応じたアドバイスに対しての感想が多く、授業時間の経過とともに記入される内容も多くなったと感じた。

④事後意識調査

事後調査を行い、次のような結果が得られた。

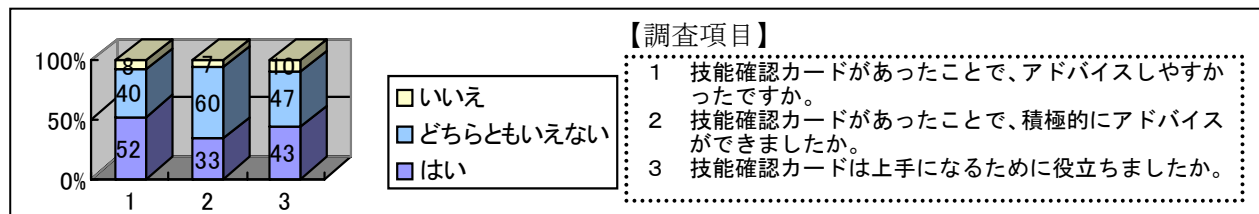


図 8 技能確認カードについての有効性

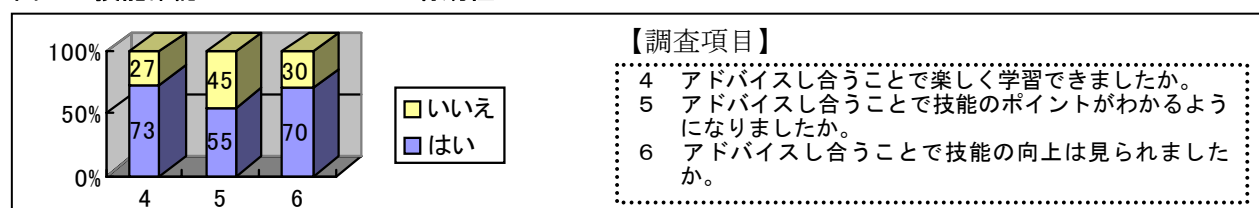


図 9 アドバイスの有効性についての調査

【肯定的な意見】

- ・アドバイスをしてもらったらうまくいった。友達が「あっ本当だ」「うまくできた」「ありがとう」とか言ってくれてうれしかったし楽しかった。
- ・なんか、こう・・・アドバイスをすると、次回はどのようにするかを考えると、次回が楽しみになってくる感じが・・・。
- ・アドバイスをいうのを遠慮していると技能があがらないので、積極的に話しかけることになる。それによって会話が増えていくのがわかった。
- ・友達に教えてもらおうとわかるようになる。
- ・友達がとても分かりやすくアドバイスをしてくれたので、技能のポイントが分かりました。
- ・アンダーハンドパスをするときなど、もう少し腕を平らにするなど、アドバイスをもらって目標のところに打てました。
- ・サーブの時、「最後に腕を伸ばすと、飛ばしたい方向に飛ばよ」といわれてやったらできた。

【否定的な意見】

- ・アドバイスがこなかった。
- ・アドバイスをしあっても良くわからなかったです。
- ・みんなから「うまくなったね」といわれていない。

⑤教師の感想

【学習意欲に関して】

技能確認カードがあることで、何を見てアドバイスすればよいのかが明確になり、積極的に取り組むなど子どもの反応が予想以上に良かった。見られている子どもも自分の見てほしいところを伝えるなど意欲的な取組が見られた。

【技術的なアドバイス】

技能確認カードに書かれていることを理解し、それを仲間に伝えようとするなど意欲的な姿が見られた。また、学習カードへの記述される内容もこれまでは少なかった技能的な内容の言葉を使い、学習カードに記述するようになった。

⑥考察

学習カードの子どものコメントを見ると、技能確認カードを使用して教え合い活動をした結果、その直後から学習カードへの記述内容が良くなっていることがわかった。しかし、事後調査を見てみると、「技能確認カードがあったことで、アドバイスしやすかったですか。」の問いに対しては、60人中31人(52%)が「はい」と答えているにとどまっていることや、「技能確認カードがあったことで、積極的にアドバイスができましたか。」が60人中20人(33%)、「技能確認カードは上手になるために役立ちましたか。」が60人中26人(43%)と、「はい」と答えた子どもが少なかったことから、技能確認カードを使用した直後にコメントが良くなっているとしても、技能確認カードを使用したことでコメントが良くなったとはいえない。

技能確認カードは、技能のポイントを明記することで子どもたちがそのポイントを教え合うことを期待して作成したのだが、事後意識調査からも、子どもたちにはアドバイスしやすい言葉ではなかったことが考えられる。また、カードの使用方法については、カードは上手になるために役立ったと答えた子どもが少なかったことから、カードの提示の仕方に問題があると考えられる。知識の獲得や技能の習得に関しても、事後意識調査の結果から、技能確認カードは有効であったとは考えにくい。これらのことから、カードの内容や使用方法について見直しを図る必要があると考える。

(4) 検証授業3

①学習資料について

学習資料に載せていた技能のポイントについては、新しい学習指導要領のハードル走の例示を基に、「スタート」「ハードリング」「インターバル」とそれぞれの局面において速く走り越すポイント、困った時の状況、具体的なアドバイスの例、練習の場を載せることとし、アドバイスカードとした。このアドバイスカードは、練習の場の工夫や活用する時間を考慮しながら子どもに提示した。

②アドバイスカードの活用前と活用後の友達へのアドバイスの変容

1時間目から3時間目まではアドバイスカードを使わず、学習の進め方や基本的な動きについて指導し4時間目から活用した。3時間目まではアドバイスやそれに伴う表現も曖昧で、友達に伝わりにくいなど、具体的なアドバイスになっていないことが多かった。しかし、カードを活用することで4時間目以降はポイントを抑えたアドバイスが増え、しだいに身体を使って表現するようにもなった。

表4 友達へのアドバイスの変容

時間	友達へのアドバイス	変容の理由・背景
1	<ul style="list-style-type: none"> 「右だったらずーっと右で、左だったら同じことをしたほうがいいよ。」 「ハードルと幅が小さくてよかった。」 「タイムを短くするためにジャンプするタイミングがバッチリだよ。」 「走り方をもうまくしたほうがいい。」 「もっとスピードをつけるとより速くとべるようになると思います。」 	<ul style="list-style-type: none"> ポイントをつかんだアドバイスかもしれないが、表現が曖昧で友達に意味が伝わりにくい。 スピードをつけるには、どうしたらよいか、という具体的なアドバイスにはなっていない。
2	<ul style="list-style-type: none"> 「足があがっていて全力で走っていると思う。」 「上手で速い人の跳び方、足の形などを少し取り組んで少しずつ速くなった」「足をそろえたら速くなるんだね。ほくもマネする。」 「僕てきに、スタートダッシュだけじゃなく、他の何かがあるから速くなれたと思う」 	<ul style="list-style-type: none"> 2時から個人のめあてがあり、学習のはじめにグループで互いにめあてを確認し合っていたのでめあてに対するアドバイスもあった。 まだ、具体的に何がいいのか、分かっていない？言葉にならない？
3	※「教え合い」の活動をしなかったため、アドバイスの書き込みはない。	
4	<ul style="list-style-type: none"> 「前よりも跳べるようになってきたので、次はリズムよく跳べるようにすると思います。」 「速くに着地できていた。あと足を前に出せばすごく速くなると思う。」 「バランスが崩れたら、左手を前に出すといいよ。」 	<ul style="list-style-type: none"> 友達の動きを見て、次の課題も含めてアドバイスしている。 アドバイスカードに書いてあることが出てきている。
5	<ul style="list-style-type: none"> 「最初やった時よりも姿勢も低くなっていて、振り上げ足もよくなっていて、抜き足もあがっていた。」 「もっと前に体重をかける」 	<ul style="list-style-type: none"> このようなアドバイスをもらい、次の課題にする子もいた 課題の練習のときと、練習後の成果を比べてアドバイスしている。
6	<ul style="list-style-type: none"> 「第1ハードルを走りこす勢いが次のハードルにもスムーズにいったのでよかった。」 「跳ぶ時に無理にあわせようとしているから白い線から走るという工夫をしたほうがいい。」 「一番初めに跳んだ時よりも、上体が前になっていたよ。」 「この前やったポイントも出来ていた」 	<ul style="list-style-type: none"> アドバイスカードの言葉を自分なりに工夫して伝えている。 グループでアドバイスを続けたことで、友達の上達に気づくことができている これ以外にもほとんどの子のアドバイスが具体的になっている。また、アドバイスを生かす子が増えてきていることも感想からわかる。

③事後意識調査

教師のアドバイスへの評価

事後意識調査を行い、次のような結果が得られた。

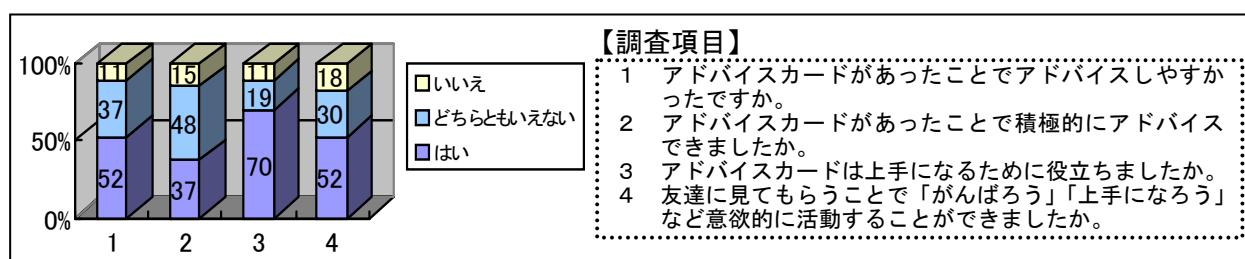


図10 アドバイスカードやアドバイスに関する調査1

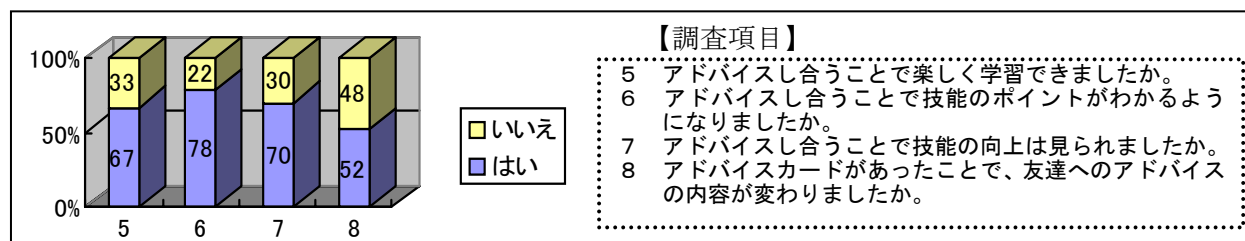


図11 アドバイスカードやアドバイスに関する調査2

【肯定的な意見】

- ・友達にこうするといいよといわれ、だんだん楽しくなりました。
- ・友達にいろいろアドバイスをもらうとき、積極的に話せて楽しかった。
- ・アドバイスをしてもらってうまくなるという意識が高まってわくわくしたとき楽しく感じた。
- ・「これはこうするといいよ」といわれたので、もう一回やったらできた。
- ・お手本を見せてもらったら技能のポイントが分かった。
- ・アドバイスをし合うことでタイムが速くなった。(複数)
- ・友達アドバイスを聞いてそのとおりにやったら上手になった。
- ・タイムは遅くなってしまったけど、自分なりにいい高さを見つけてやりやすくなった。
- ・アドバイスカードがあったことで、具体的にいえるようになった。
- ・最初は「私もそう思います。」といていたけど、だんだん慣れてきて「ここは上手だから他ののをやったら」というようになりました。
- ・アドバイスカードに書いてあることをいうようになりました。
- ・「もう少し〇〇したほうがいいよ」や「前よりよくなった」などのアドバイスを友達に伝えることができるようになった。
- ・アドバイスカードがあることで積極的に話すことができた。
- ・自信をもっていえるようになった。

【否定的な意見】

- ・技能のポイントはむずかしくてあまりわからなかった。

④教師の感想

【学習意欲に関して】

アドバイスカードを使うことで、言葉の内容が断然変わってきた。アドバイスカードのような話すための資料を子どもが活用することによって、使われる言葉や学習するにあたっての知識の獲得に大いに役立ち、アドバイスや話し合い活動ではより具体的な言葉づかいが多くなった。そのため子どもが自信をもって授業に参加し、友達に声をかけやすくなった。

【技術的なアドバイス】

授業でアドバイスカードを使用した後は、具体的な技術のポイントやアドバイスのポイントがわかったことから、アドバイスの数が多くなった。また、しだいに身体を使って表現するなどのアドバイスする姿も多く見られた。

⑤考察

検証授業3では、検証授業1と2で明らかになった改善すべき点の修正を図りながら、話し合いのルールカードとアドバイスカードを活用し検証を進めた。

その結果、アドバイスの内容については、アドバイスカードを活用した4時間目以降は、「バランスを崩したら左手を前に出すといいよ」「もっと前に体重をかける」(表4参照)など、友達へのアドバイスが

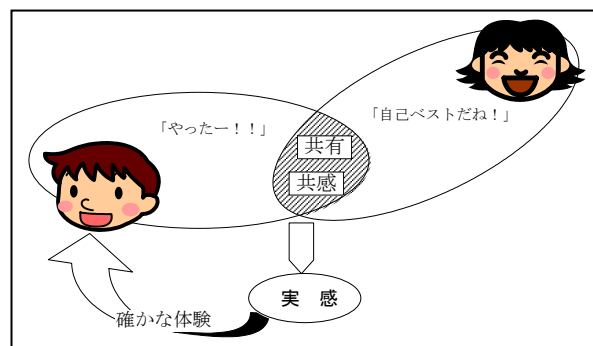


図12 気づき合いによる共感から実感が生まれる (落合 優 2007)

具体的になり、また、技術的な言葉が増え、明らかにアドバイスの内容に変化が見られた。落合⁵⁾は、「かかわりの中で共有や共感から実感が生まれ、確かな体験になる」(図12参照)と述べており、子どもが互いに気づきあったときに共感し、そのことが実感に変わることで確かな体験につながると考えられる。今回の検証でも、アドバイスをし合う中で「めあてを確認し合った」(共有)や「うまくできた」「前より良くなった」(共感)など共有や共感ができていたことから、仲間とのかかわりが豊かになることや、仲間にも認められることから実感がわき、確かな体験につながったことがわかった。このことは自信となり、学習意欲の高まりにつながるといえる。

また、技能については、図11の6「アドバイスをし合うことで技能のポイントがわかるようになりま

⁵⁾ 落合 優 「子どもの体力低下と運動・スポーツ実践」 小学校体育ジャーナル No.50. 1-4. 2007

したか。」の問いについて、27人中21人(78%)が「はい」と答えており、図10の3「アドバイスカードは上手になるために役立ちましたか。」の問いに、27人中19人(70%)が「はい」と答えていることから、アドバイスカードの内容を多くの子どもが意識し、積極的に活用したことで理解が深まり技能のポイントが分かったといえる。

アドバイスカードの活用方法については、図10の1と2の結果から見て、アドバイスをするために有効であったとはいいがたい面もある。しかし、カードを使用した時間が授業を開始して間もないこともあり、カードの使い方や知識の獲得状況・技能の習得状況などの課題は残されていると考えられる。

知識の獲得と技能の習得に関しては、指導者が「アドバイスの内容に関してもアドバイスカードを使用する前には曖昧な表現であったものが、使用後は具体的なものになり、しだいに身体表現も交えるようになった。」と感じていることや、子どもが「友達にお手本を見せてもらったから技能のポイントがわかった。」などの身体表現を交えるようになったことを考えると、知識が獲得できたことで動きをイメージし、イメージしたことを身体表現できるようになったと考えられる。

また、技能の習得に関しては、図11の7「アドバイスし合うことで技能の向上は見られましたか。」の問いに対し、27人中19人(70%)が「はい」と答えていることから、アドバイスカードを使用し、アドバイスし合うことで技能の習得にもつながったと考えられる。

Ⅲ 研究のまとめ

1 仮説の検証

体育学習における言語活動を充実させるためには、その時間の学習を通して、どのようなことを身に付けさせたいのかというねらいを明確にすることが大切であるということがわかった。検証授業では、学習意欲や知識の獲得、技能の習得などを身につけさせることをねらいとし、学習資料を活用することで「話し合い」や「教え合い」などの活動を授業に取り入れた。その結果、話し合い活動を用いた授業では、「話し合いのルールカード」を活用することで、仲間を尊重するなどの意識が高まり、「自分のアドバイスを聞いてくれた」「間違っても自信が持てた」など、仲間と話すことに対する自信や安心感が生まれ、学習の質の高まりにつながることがわかった。

また、教え合い活動を用いた授業では、アドバイスの質や内容を高めるため、「技能確認カード」や「アドバイスカード」を活用した。その結果、アドバイスの内容や技能のポイントを教えあうことで仲間とのかかわりが増え、理解の深まりにつながったと考えられる。「あいまいだったアドバイスの内容が具体的になった」「身体表現を交えて教えていた」という教師の感想や、「タイムの向上や技能が向上したと感じる」など子どもの感想からも、ねらいに応じたアドバイスのポイントを示した学習資料を活用することで、学習に対する意欲の向上や知識の獲得、技能の習得などにつながることがわかった。

このことから体育学習において、「話し合い」や「教え合い」などの活動を通じて言語活動を充実させることは、安心して学習することができるなど、体を動かすことの楽しさや喜びを味わうことにもつながり、体育科の目標でもある「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成」いわゆる「生涯体育・生涯スポーツの育成」につながることと考えられる。

2 今後の課題

今回の研究では、言語活動を充実させることで、コミュニケーション能力や学習意欲の向上、知識

の獲得や技能の習得につながるということが分かった。しかし、話し合い活動による知識の獲得や技能の習得については十分な検証を得ることができなかった。今後、話し合い活動においても、言語活動を充実させることで、知識の獲得や技能の習得につながるような手立てや支援などを検証していきたいと考えている。

また、発達の段階を踏まえた（学年別の）言語活動についても、検証を深める必要があると考えている。単に言語活動といっても言葉の理解は小学校1年生と中学校3年生では大きく異なり、知識の獲得や技能の習得にも大きな影響がある。そのようなことから、子どもの発達の段階を踏まえながら「教え合い」や「話し合い」の活動を取り入れ、学習資料やその内容・使用方法などを検討していきたい。

また、体育学習では領域や種目によってコミュニケーションの内容が異なることから、領域や種目によっては、教え合い活動を重視する場合と話し合い活動を重視する場合がある。今回の研究は、各々の学年でひとつの領域を検証しており、領域や種目の違いを検証することはできなかった。

このような課題を解決することは、新しい学習指導要領の「言語活動を充実させることは、思考力・判断力・表現力等をはぐくむための重要な活動であり、確かな学力の充実は基より『生きる力』をはぐくむことにもつながると考えられる。」という『生きる力』の育成にもつながることでもあると痛感した。

最後に、研究を進めるに当たり、ご支援ご助言をくださった先生方、また、校長先生をはじめ学校教職員の皆様に、心より感謝し厚くお礼申し上げます。

【参考・引用文献】

- | | | |
|-------------|--|----------|
| 出原 泰明 | 『「みんながうまくなること」を教える体育』大修館書店 | 1991年 |
| 高橋 健夫 | 『体育の授業を作る－創造的な体育教材研究のために－』大修館書店 | 1994年 |
| 高橋 健夫 | 『体育の授業を観察評価する』明和出版 | 2003年 |
| 北川 達夫 | 『フィンランドメソッド入門』経済界 | 2005年 |
| これからの授業に役立つ | 『新学習指導要領ハンドブック 中学校保健体育』時事通信社 | 2008年 |
| 落合 優 | 「子どもの体力低下と運動・スポーツ実践」小学校体育ジャーナル
50号 学研 | 2007年1月 |
| 三森ゆりか | 「『言語能力』の育成に配慮した体育授業への提言」体育科教育
第56巻 第5号 大修館書店 | 2008年5月 |
| 白石二三恵 | 「コミュニケーション能力を育む授業をデザインする」
体育科教育 第56巻 第10号 大修館書店 | 2008年10月 |

【指導助言者】

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 横浜国立大学教授 | 落合 優 |
| 筑波大学准教授 | 岡出 美則 |
| 川崎市小学校体育研究会会長（川崎市立高津小学校長） | 櫻井 康治 |
| 川崎市中学校教育研究会保健体育科部会長（川崎市立川中島中学校長） | 高井 明 |
| 川崎市教育委員会主幹 | 渡邊 壽久 |
| 川崎市総合教育センター指導主事 | 大内 孝二 |